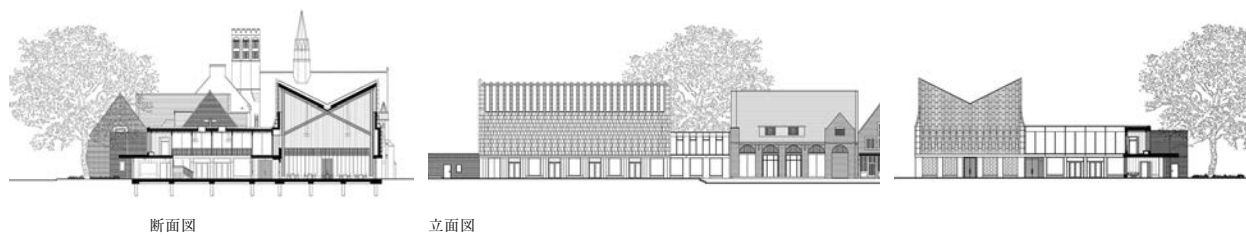


あらゆる年齢の学生のために

「ダイニング・ホール」
ケンブリッジ大学ホマートン・カレッジ」
Cambridge, U.K.
設計=フェイルデン・ファウルス・アーキテクツ

参照 | 本誌 pp.4-13

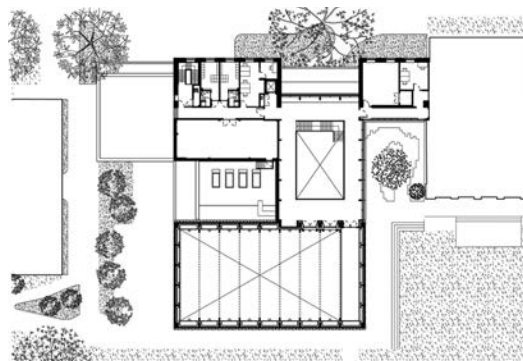


マルコ・ピアージ

2022年5月の『CASABELLA』933号にて、「環境的既存物の中で」建てるというテーマに敏感なイギリスの若手建築設計事務所のひとつとしてフェイルデン・ファウルスを取り上げ、彼らが近年手がけた、ゴシック様式のカーライル大聖堂食堂棟の増改築プロジェクトの写真を数点掲載した。ケンブリッジのホマートン・カレッジに数ヶ月前に竣工した新しい大学食堂も、同じ方向性の探求であり、歴史的建築と過去の多様なフォルムとの直接対決を試みた作品である。ホマートンはイギリスの名門大学ケンブリッジで最も新しい——さらに学生数の多さでは最大の——カレッジであるが、キャンパスの建物はすべてヴィクトリア朝のもので、新しいダイニング・ホールと付帯設備は、広大な芝生の北正面を形づくる建物群の西端を閉じている。とりわけ、この建物は、1914年にアーツ・アンド・クラフツ様式で建てられたイバーソン館(イギリス指定建造物)と動線上も連続するよう配置された。付加物と既存



1階平面図



2階平面図

物の間に対話を打ち立て、無関心も擬態も避けられるような表現上の妥協点を探す必要性が、設計当初からプロジェクトの前提かつ挑戦として課された。この挑戦に対して、ファーガス・フェイルデンとエドマンド・ファウルスは引用やディテールを注視したばかりか、現地の歴史的建造物の建築的特質を再解釈し、転写することに狙いを定めることで、適切な解の提示に成功した——組積壁の堅牢性、色彩、立面のリズミカルな分割、切妻屋根の反復、

そして特に、21世紀の可能性に合わせて更新された職人細工の復活。このことは構造部材——例えば、食堂の屋根を視覚的に支える、栗の合板を使ったバタフライ形トラスの骨組みは、檜の木片で手作りした伝統的な嵌合材を使い現場で組み立てられた——についても、また装飾についても当てはまる。装飾的要素のうち最も際立ち、人目を引くのは、ダイニング・ホールのヴォリューム上部の外壁を覆う、緑色のマジオリカ焼の波打つ被膜であり、



左にダイニング・ホール、中央にイバーソン館を見る

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan



南側ファサード



東側ファサード：右にイバースン館を見る



ダイニング・ホール内観

これにはパラメトリック・モデリングの方法で制作された3,200個の陶板が使われた。336席の規模で、日常的にも式典にも使えるよう構想された大学食堂は、調理室や従業員と利用者用の設備スペース、配膳ゾーンを備え、2フロアのカフェテリアでは気軽な会食や学習もできる。

作品：ダイニングホール | ケンブリッジ大学ホマートン・カレッジ

設計：フェイルデン・ファウルス・アーキテクト

設計チーム：Edmund Fowles, Eleanor Hedley, Akshara Pulpa,

Rory Allen, Ben Higham, Nick Crane, Matthew Glen

設計責任者：Nick Bryant, Ingleton Wood Martindales

構造：Peter Laidler-Sophie Frith, Structure Workshop

設備：Andy Johnson, Max Fordham

音響：Josh Rodell, Max Fordham

サステナビリティ・MEP エンジニア：Hero Bennett, Max Fordham

土木工学(排水設備)：John Bowstead, Peter Dann

建築積算士：Tim Harwood, Bremner Partnership

ランドスケープ：Jack Marshall, SEED(コンセプト);

Mark Rogers, Hortus Collective(施工)

建築主：Homerton College

施工：Matthew Ramplin, Barnes Construction

陶板仕上げ：Darwen Terracotta-Szerelmey

木造：Constructional Timber | 内装木工：Classic Barfitting Ltd

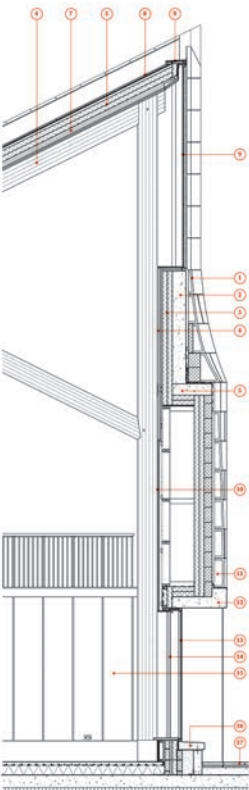
現場打ちコンクリート：MJS Construction

規模：敷地面積 3,000m² / 延床面積 1,665m²

スケジュール：設計 2017年/施工 2020-22年

所在地：Homerton College, Hills Road,

Cambridge CB2 8PH, U.K.



断面ディテール



東側壁面のディテール



南側壁面のディテール

「早稲田大学本庄高等学院体育館」埼玉県本庄市

設計＝日建設計

参照 | 本誌 pp.14-21

マルコ・ピアージ

建築家とエンジニアを含む2,700人以上の社員を擁する日建設計は、日本で最も歴史があり評価の高い建築設計会社のひとつであり、大規模事業やインフラストラクチャーの分野で国際的に活躍している。そうした分野ではおもに公共機関もしくは大企業が建築主となり、高い構造的パフォーマンス、技術力、施工の精密さ、工程监理の信頼性が求められる。建築表現の面での実験は、概して、コミュニケーションの次元が決定的な影響を及ぼすことの多い小規模な建築計画、特別な機会、文化・教育的性格の活動に関わる設計業務に限定される。このケースに当たるのが、埼玉県本庄市にある有名私立学校・早稲田大学本庄高等学院に近年完成した新体育館である。サッカー・グラウンドの端に離れて置かれ、教室のブロックとブリッジで結ばれた体育館は、角を丸めた、簡潔でミニマル的な打ち放しコンクリートの直方体として造形されている。この建物は技術的装置というよりも、詩的反応を引き起こすオブジェとなることを志向する。建築家たちが関心を注いだのは、機能性だけでなく雰囲気のある空間の設定であり、そこはいくつもの孔が穿たれたコンクリート壁の粗々しい肌理に彩られ、屋根の両端を切り抜いた開口部から降り注ぐ自然光の変化により活気づけられている。1階はあたかも地下室のような仕組みである。諸設備——倉庫、機械室、更衣室、ミーティング・ルーム、体育系部室、教員室——が密集する小空間群と2つの小体育館——フィットネス器具があるトレーニング・ルームと、剣道、卓球、ダンスのための多目的室——から構成される。これらが基礎構造となり、その上に2階の体育館本体が載る。柱など障害物のない広大なアリーナは43×32m、高さ11mである。この寸法は屋根を支えるグリッド状の鉄骨大梁と等しいが、グリッドを45度に振ることで、地震発生時の周壁への応力を和らげる。基壇の凝縮した迷宮のような性格は、これと対照をなす、上階のアリーナの広い規模とゆったりした雰囲気を際立たせている。アリーナの外周にトンネル状の回廊を積み重ねて接合することにより、断

面に垂直のフィーレンデル梁と同じ構造が生まれる。
建物の中核を異なる高さで取り巻くこれらの回廊は動
線、ランニング・コース、屋内気候を調整する設備ス
ペースとなっている。

作品：早稲田大学本庄高等学院体育館

設計：飯島敦義/日建設計

総合監理：早稲田大学キャンパス企画部

施工：戸田建設株式会社(建築)/

東光電気工事株式会社(電気設備)/

斎久工業株式会社(機械設備)

建築主：早稲田大学

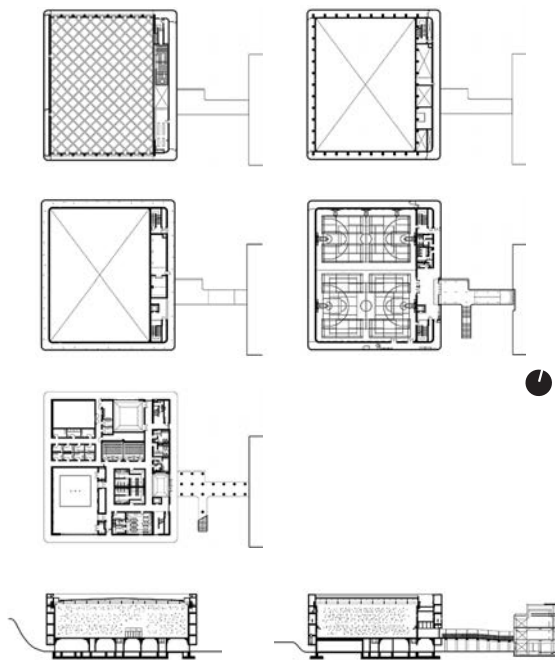
規模：敷地面積 63,077.60㎡ / 建築面積 2,417.74㎡ /

延床面積 4,465.86㎡

スケジュール：設計 2016年9月～18年6月 /

施工 2018年7月～20年2月

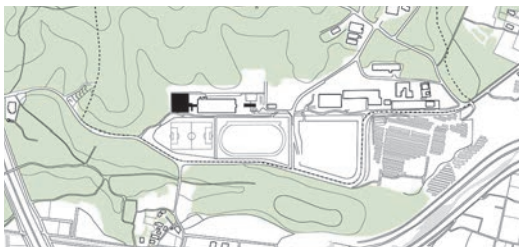
所在地：埼玉県本庄市



各階平面図/断面図



南西より見る



配置図



南東より見る



2階アリーナ



1階多目的室



1階ミーティング・ルーム



3階ランニング・コース

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

イタリアで大学を設計しているのは誰か？

ミラノ工科大学の場合

マルコ・ピアージ、カミッロ・マーニ

参照 | 本誌 pp.22-23

ボリーザのミラノ工科大学ラ・マサ・キャンパスに「学生の丘」と名付けられた建物が完成した。本稿に続いて紹介するこの作品に触発されて、ロンバルディア地方の枢要大学である工科大におけるその都市的拠点の改革と強化の観点から近年実現されたものへ視野を広げ、このような成果に到達するために構想され実行された実務的な戦略について考察してみたい。

過去10年間に、ミラノ工科大学は学生と教職員のための教育空間を改善すべく強力な政策を進めてきた。このアクションは、ポリテクニコのような有名大学には当然予想されたものに映るかもしれない。けれども、行政を動かす手続き上の困難な条件と、イタリアの歴代政権が、それぞれの政治方針と関係なく、かなり以前から僅少な経済的資源しか教育分野に投じてこなかったことを鑑みると、看過すべきではない。さらに、ボヴィーザ・キャンパスで起きたような、資本の大部分を公有地再開発に回すという工科大学の選択も些末なものには思えない。公有地の発展は郊外地区の再生に貢献しており、その嚆矢となったのが、ミラノ市が買い取った旧ガス製造工場地帯を、教育、研究、起業支援、学生寮、運動施設のある緑地のための空間を置ける大学新キャンパスにコンバージョンするプロジェクトであった。

ミラノ工科大学の歴史ある本拠地、レオナルド・ダ・ヴィンチ広場のキャンパスも、抜本的な再開発の対象となった。性質の異なる厳密な一連のプロジェクト(通例・特例

の単純な維持管理工事から、一部の建物の完全な置換まで)により、キャンパス全体の相貌が変化し、空間の利便性と環境のクオリティが向上した。数多くのプロジェクトのうち、レンゾ・ピアノからアイデア提供を受けて建築学部で実現されたものは言及しておきたい。足し算と引き算、すなわち1階をヴォイドにして車道レベルに連結しなおすという慎重な作業を通して、地表より下のレベルに広い空間が新たに創出され、すべての建物がそこに面して建つことにより、大学生活の新たな焦点となった。また、エドゥアルド・ソウト・デ・モウラの設計に基づき現在建設が進められている、未来の「ドムス・ポリテクニカ」にも触れなければならない。それは20世紀にできた工学部の中庭に差し込まれた、ガラスのヴォリュームである。

ボヴィーザのガス製造工場地帯に完全に新しい大規模キャンパスを建設するという1990年代のヴィジョンは、過去のものとなった。1990年に工科大の3学部の教員たちが「合唱曲」仮説のもと作成した「アカデミック」な案も、その後1997年に発表された国際設計競技が1999年にフランスと日本の2つの応募案の同列勝利となり、両案の妥協的解を探ることで生まれた案も、同様である[注1]。今日におけるアプローチは、はるかに実践的で効果的になっている。慣習的な進め方に比べて、驚くほど短期間で達成された数多くの評価すべき目標は、手早く集中的な意思決定プロセスの結果であり、それは「ジェルミーニ改革」が開始された2010年頃から大学運営に波及した、企業利益優先主義への転換を反映している。

しかしながら、現代の都市生活の他の領域でも起きているように、効率を至上命令にすると討論と参加の側面が犠牲になる事態がしばしば生じており、成果は保証するとしても、それが常に可能な限り最良のものとは確

証できない。

熟慮すべきは、大学キャンパスの改変プロセスを支える文化政策が、両極端の評価に偏向している問題である。一方では、工科大学のような公立の「計画系」大学にできる限り主役として目立ち、幅広い提案を表明することを許す。これは1990年と、より限定的な他の非常事態(V・ヴィガノ、G・ボンティらが実現した作品に代表される事例)に起こったとおりである。他方では、キャンパス改変を契機に、世界の建築界に開かれた設計競技を用いて、建築を推進する(近年、グラフトン・アーキテクトとSANAAに委嘱されたボッコーニ大学の2つの増築事業はこれに相当する。それぞれ『CASABELLA』768号、925号に掲載)。不確かで「リスクの高い」結果につながるこの二極のうち、ミラノ工科大学はパフォーマンス的経営の発想を好んだ。しかしそれは、アイデア、建築のクオリティ、アカデミアの風景のアイデンティティとなる特質の点でより一層野心的な到達点を希求するために必要な、貴重な可能性を秘めたエネルギーとさまざまなリソースの生成過程を、奪い取るリスクを冒しているのである。

[注]

1——1960年代末の初期構想から、ボヴィーザの旧工業地帯に工科大学本拠地を置くまでの出来事を時系列的に並べた便利な摘要が、以下の新刊書に収録されている。Giorgio Fiorese, *Aura di Bovisa. Produzione, conoscenza, figurazione*, Maggioli Editore, Santarcangelo di Romagna 2022.

2——Cfr. *Architetture al Politecnico di Milano. Università e città*, a cura di Federico Bucci ed Emilio Faroldi, Silvana Editoriale, Cinisello Balsamo 2021.公式ホームページも参照されたい。<https://www.vivipolimi.polimi.it>



レンゾ・ピアノが参画した教室・ワークショップ棟



ソウト・デ・モウラ: 工事中のドムス・ポリテクニカ

「ミラノ工科大学ラ・マサ・キャンパス『学生の丘』」

Milano, Italy

設計=ミラノ工科大学

参照 | 本誌 pp.24-29

マルコ・ピアージ、カミッロ・マーニ

旧「ガス製造工場地帯」にキャンパスを新築するという1990年代の野心的な仮説は、大学教員自身が設計したもの(1990)も、招待設計競技を介して選ばれた建築家と企業の国際的連合体の計画案(1999)も最終的に断念され、ミラノ工科大学は、ボヴィーザと大学都市にあ

るキャンパスのために少し前から再編、効果促進、既存物の統合というより実践的戦略を採用した。この戦略は、「Vivi.Polimi.lab」と名付けられた作業グループ——教員、研究員、有償スタッフから構成され、ミラノ工科大学学長代行の肩書で、「建物、空間、サステナビリティ」の管轄を委任されたエミリオ・ファロルディが取りまとめた——と、レンゾ・ピアノとエドゥアルド・ソウト・デ・モウラという議論の余地なき優れた客員教授で卒業生の即興的だが質の高い貢献により、大学内部の集中的な機構を通じて運営、実施された。

この実施機構により完了した最新の事業の中でも、設計への投資とアカデミアという小規模な風景への影響の

範囲の点で特筆すべきは、ボヴィーザのラ・マサ通りの一区画における「学生の丘」と命名されたアイコン的建物の建設である。これは敷地の平坦な地形に木々のある人工的な隆起を導入し、修復された古い工場と新しい校舎の混在した積層の中に、機能的で視覚的な中心性の要素を設けるものである。

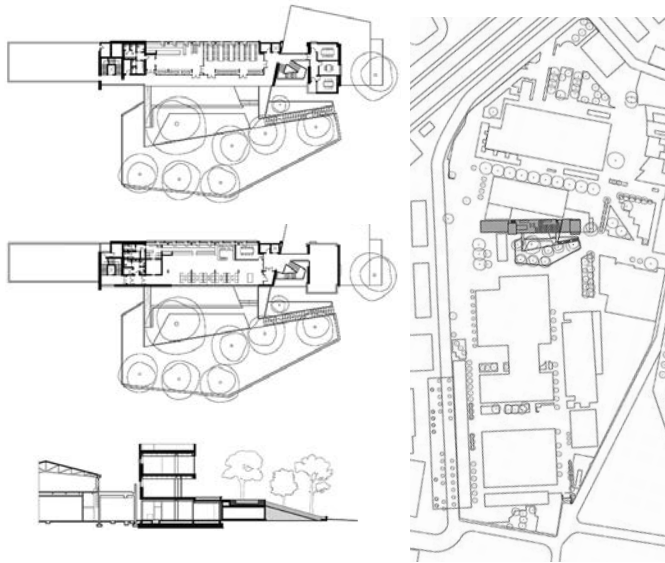
ヘリポート跡地の荒れた空き地を敷地とした建物は、3層に分節化された。倉庫と機械工学部の引張強度実験室は基壇の緑色の被膜の下に隠されている。インターネット接続席が70ある自習室と学生がアプリで予約できる3つの会議室が2階にある。3階の教員が交友できる学部専用スペースには、バー・レストラン、自由時間を過ごし



北東より見る



南東より見る



2-3階平面図/断面図

配置図

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

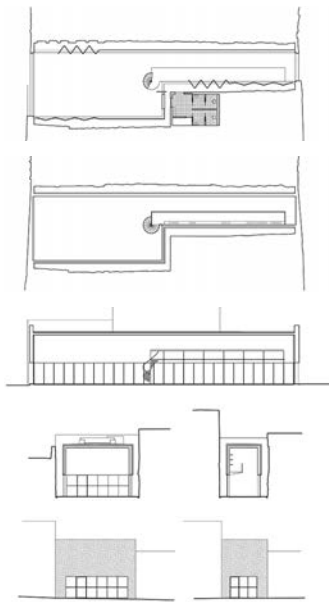
「建築遺産の家」 Muharraq, Bahrain

設計=レオポルド・バンキーニ+ノウラ・アル・サイエ・ホルトロップ

参照 | 本誌 pp.48-55

「建築遺産の家」は、建築家のジョン・ヤーウッドのスケッチと図面のアーカイヴ・コレクションを収蔵し、建築展の会場として機能する建物である。これは隣接する2つの建物の壁のテクスチャーを縁取る梁の構造体として構想されたプロジェクトで、歴史が古くかつ現代的なこの都市の建築遺産を演出する。

本作は敷地の都市的条件の内在的表現として理解すべきもので、利用者に地形を解説したヴィジョンを提示し、都市が経験した複数の建設段階を明らかにする。2つのメイン・ファサードに組み込まれたシャッター扉を梁の下端まで内側に引き上げると、展示空間が車道に向けて開かれ、建物を公共のパッセージに変貌させる。この戦略により、屋内空間は公共の街路と一体となり、内部空間に都市の様相を帯びさせることで、市民たちにさらなる参画を促す。このプロジェクトは、建築的構想を通して、現地共同体に参加を促すアプローチを持った文化スペースを提案し、排除されたと感じることの多い人々の居住区に、公道に完全に開くことのできる場所を授ける試みに取り組むものである。



1-2階平面図 / 断面図 / 立面図

物理的なコンテキストは拾得物と見なされ、世話が必要でそれ独自の条件下で——内壁の「発見時の」状態を保存したまま——解釈すべきものと捉えられた。そこで新築の建物は、速いリズムで発展する都市の過渡的状況をスナップ写真のように凍結する力を帯びる。

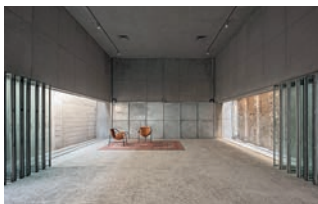
構造全体は完全に鉄筋コンクリートで造られ、「横断」^{クロスワイズ}梁が敷地の26mの奥行き全体を縦に伸びて、両端を道路に連絡する。コンクリートは、珊瑚石灰石を主とする都



南側ファサード



北側ファサード



北側ギャラリー



ギャラリーより隣接する建物壁面を見る

市の他の建材とコントラストをなす。

作品:建築遺産の家

設計・現場監理:レオポルド・バンキーニ+ノウラ・アル・サイエ・ホルトロップ

建築主:Sh. Ebrahim Centre for Culture & Research

規模:敷地面積 209m²

スケジュール:竣工 2017年

所在地:Muharraq, Kingdom of Bahrain



北側より南側ギャラリーを見る



ギャラリー2階のアーカイヴ・スペース

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan